樂音

佛歴二五六五　西歴二〇二二
令和四年二月号
発行　楽音寺　内藤睦雄
電話　090-3140-3931
FAX　0553-47-3495
寺庭　080-2065-7939

樂音寺の護法神「韋駄天さん」　掌を合わせ必死に祈る姿に心打たれます

韋駄天さん

庫裡は全焼しましたが、隣接している本堂はトイレや玄関のダメージはあるものの無事でした。それは消防のおかげなのですが、よくぞあの炎が本堂を飲み込まなかった、まさしく奇跡だねと、多くの方に言われました。実はそのちょうど本堂との境目辺りに韋駄天さんという神様が祀られていました。四十年ほど前に、前住職の父がどこからか手に入れたもので、当時は庫裡台所の隣のお内仏の間にありました。

朝の連続テレビドラマで記憶に新しい韋駄天走りという言葉があるように、足の速い神様として知られます。それは鬼が、仏舎利を奪って逃げようとしたところを、これを追って取り返したという俗伝から言われるようになり、果ては盗難除けの神様と信じる向きもあるようです。日本では厨房や建物伽藍を守るいわゆる護法

神として祀られることが多い様です。また韋駄天さんが、お釈迦さんのために方々を駆け巡って食物を集めたという俗信に由来して「御馳走」という言葉ができたことはよく知られています。

煤だらけの写真の韋駄天さんは、庫裡が復興するまで本尊薬師如来の脇でゆっくりして頂きます。ありがとうございました。

先月の掲示板

去年今年　貫く棒の如きもの

ＮＨＫの年末の定番「ゆく年くる年」という番組名も、「こぞことし」もいずれも時の流れの中で感慨を込めて新年を表しています。しかし虚子のこの俳句は「貫く棒」つまり時の流れを超えて「我ここにあり」と不動の自我を大書されたように思います。

虚子についてはご存知の方も多いと思いますが、もともと花鳥諷詠客観写生を信念にしていると、何を読んでもそう書いてありますが「私の心の深い所にはこんな思いもある」ということを示したのではないでしょうか。

もう一つ、この「棒」とは何？このあまりにも現実的で具体的な飾りのない、それでいて解説のしようのない、ほかに言い換えようのない「棒」、どこかで断ち切ることもできない歌人の、あるいは我々の人生の本質を狙ったものか。「こぞことし」を「生きて死ぬ」と言い換えたらどうだろう。

臨済寺専門道場へ出立

折に触れて断片的に道場時代のことをお話しして来ましたが、今、私が禅宗僧侶を名乗っていられるのは道場のおかげだと思い至り、重複もありますがシリーズにして経験談をお読みいただきます。

三十五歳を迎える年の三月一日、東京生活を引き払って山梨に移りました。まだ私はパーマをかけた髪も長く、上の娘は六歳、八月出産予定の妻と小型トラック一台だけの引っ越しでした。

早々に中尾の寶樹院先々住職にご挨拶、弟子として、また僧侶としての第一歩「得度式」という儀式をして頂きました。着慣れない着物と下駄という格好です。初対面のこの和尚は一つの笑顔も見せず、多くのことを時間をかけてお話し下さいました。印象に残った事は「僧名」を付けるがどんな名がいいか、とおっしゃられ、私は今の自分には不似合いなほどに大そうな名にして欲しいと申したと思います。それなら、と白い和紙を折って、わざわざ墨をすって、あれこれ筆を選んで「大心」と書いてくださいました。これがあんたの戒名だとか、「大なる哉心」という言葉からきていることとか、どんな心か一生かけて見つけろ、みたいなことを言われ、ああ「たいそうな心か」と心の中で呟いて、その師匠寺を後にしました。

行きに送ってくれた父も帰りはいなく、塩田まで歩きながら、途中猛烈な尿意をもよおしました。

着物の恰好で道端ですることもできず、大人になって初めて着物を汚して帰ってきました。妻の悲しそうな顔が思い出されます。私の始めの一歩でした。

日々是好日（にちにちこれこうじつ）

誰もが知るこの禅語、特に私は子供のころから知っている。というと「へー、さすが！」と言われそうだがそうではない。雨の日は雨音を聴き、雪の日は雪に親しみ、夏の猛暑も冬の身を切る厳寒も五感をしっかり働かせてひとときを味わう、それが音楽だったりお茶だったり、またスポーツだったり。「お前は本当に日々是好日だな」「はあ？」「ノー天気ってことだよ」「悪いですか？」そんなやり取りを何度かした記憶がある。そう、この禅語はまさしく「ノー天気」。

人生うまくいかなかったことは山ほど、その時は誰もが辛いけど大事なところは、直面した時とそのあとの気持ちの持ち方。

中国宋代のある時、雲門（うんもん）という和尚が修行僧に向かって「今までのことはよい、それよりこれからのことを一句で唱えよ」僧たち誰も答えられなかったので、和尚が唱えた一句がこれ。要は「好日」をどう捉えるかということだと思う。

「良い日」と思えば「悪い日」も頭をよぎる。「足元のお悪い中で」と雨の日の挨拶でよく耳にするが、冒頭述べたように雨が悪いわけではない、ぬかるみも水たまりも長靴なら楽しい、ショパンは雨音をピアノ曲にしたし、限られた命の中でも毎日毎日を、それがどんな日であろうとどんなことであろうと愛おしんで受け入れる、きっとかけがえのない日と感じられることだろう。比べないから、比べられないから尊い。決して毎日良いことに出会えると思うことなかれ、そういうことで「ノー天気」。